

知識探訪

多民族社会の横顔を読む 協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシアとシンガポールにおける上座仏教—その独特な風景と今日の展開

黄蘊 (尚綱大学)



シンガポールのパウ瞑想センターにて。ミャンマーのパウ瞑想センターから派遣された僧侶(左)と、南アフリカ出身のミャンマーパウ系統の僧侶(右) = 2018年2月(筆者撮影)

上座仏教といえ、ミャンマー、タイ、ラオスなど東南アジア大陸部の国々がすぐに想起されるであろう。しかし、東南アジア島嶼(とうしょ)部のマレーシア、シンガポール、インドネシアにも上座仏教の僧侶と信者があり、近年では多数の上座仏教瞑想センターができてきたりして、上座仏教のプレゼンス

れぞれの上座仏教施設・実践方式が競合的に共存していることである。建築様式、僧侶の僧衣、また誦経のイントネーションなども異なるスリランカ、ミャンマー、タイ系の上座仏教寺院がそれぞれに存在する。一方、華人信徒は自身の好みや縁、巡り合わせなどにより利用する宗派や施設を決めている。1990年代以後、マレーシアやシンガポール出身の華人僧侶も増え始め、彼らは上記のそれぞれの宗派のもとで受戒し、実践している。

なお、スリランカ、ミャンマー、タイをもととするそれぞれの宗派内部において国内外に広がる連携関係、ネットワークが形成され、宗派・系譜が重要な意義をもってきた。一例を挙げると、2007年にできたシンガポールパウ瞑想センターという在家信者運営の瞑想センターがあり、現代ミャンマーにおける代表的な瞑想指導者の一人であるパウ師がその顧問を務めている。パウ師の弟子2人がミャンマーから巡回式で同瞑想センターに派遣され、説法、瞑想指導などを担当している。その他の海外との連携として、ミャンマーやマレーシアのパウ系統の僧侶との交流のほか、中国雲南省のパウ系統のマヒンダ師という著名な中国人上座仏教僧も定期的に来訪し、中国語による経典、教理書の翻訳、説法といった点で重要な役割を果たしてきた。シンガポールパウ瞑想センターには常駐の僧侶がいないが、このような同じ系譜内の国境を超える連携関係が同国におけるミャンマーパウ系統の瞑想実践の展開を下支えている。

タイ、スリランカ系統の宗派もそれぞれにマレーシア、シンガポールという国境を越えて僧侶の行き来や多様な連携活動を進めている。多様な宗派、実践方式が競合的に共存し、それらを管轄、統合するシステムがないまま、百花繚乱というような風景が広まり、それがミャンマー、タイといった上座仏教徒社会にはみられない独自の様相を呈している。

が強まりつつある。

マレーシアとシンガポールに関していえば、それぞれ華人住民が両国の3割弱、8割前後を占め、大乘仏教、中国系の民間信仰が割と盛んな地域というイメージがある。統計では確かにこの両国の華人住民の宗教信仰としていずれも仏教が全体の5割以上を占めており、またこの場合の仏教は基本的に大乘仏教をさす。

一方で、植民地時代に始まるスリランカ、大陸部諸国からの人的流動などにより、上座仏教は実は19世紀からすでにこの両国に伝わっている。もともとはスリランカ、ミャンマー、タイ系移住民のための上座仏教はその後徐々に現地の華人住民の参入を集めるようになり、今日この両国ではいずれも華人住民がすでに上座仏教徒の多数派を占めるようになっている。つまり、大乘仏教も上座仏教もその信者層は基本的に華人住民で、中には両方を同時に実践する華人もいる。なお、マレーシアとシンガポールの上座仏教の展開はほぼ同じ歴史的脈を有し、両国の上座仏教僧侶、信者間の交流、連携もかなり緊密に保たれている。

上座仏教徒社会であるミャンマー、タイなどでは、仏教が共同体的慣行や地域文化と深く結びついている。仏教は人々の生活様式、共同体的規範であり、政治や社会生活全般とも密接な関係をもつ。それに対してマレーシアとシンガポールでは、上座仏教の歴史は相対的に浅く、共同体的な儀礼、慣行とそこまで結びついておらず、知識や実践として存在している側面が大きい。その背景には、英語教育を受けた華人知識層が上座仏教に教養と癒しを求め実践してきたという脈がある。

両国における上座仏教の特徴としてもう一つ重要な点は、スリランカ、ミャンマー、タイをもととする仏教宗派、そ

< 筆者紹介 >

大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士(人間科学)。専門は文化人類学で、マレーシアとシンガポールの多元社会の問題、東南アジア島嶼部、または大陸部の上座仏教を研究している。著書に、『東南アジアの華人教団と扶鸞信仰 徳教の展開とネットワーク化』(2011年、風響社)、『往還する親密性と公共性 東南アジアの宗教・社会組織にみるアイデンティティと生存』(編著)(2014年、京都大学学術出版社)。